

令和 5 年度 自己評価表

鳥取県立鳥取盲学校

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒が自己の持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うとともに、教育的ニーズに応じた指導の充実を図る。 (ミッション) 自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。(QOLの向上) (キーワード) 「深める」	今年度の重点目標	①主体的に取り組む態度の涵養を目指す教育の充実(専門性の向上) ②キャリア教育の推進 ③仲間と信頼関係を深め、協力して生活の質を高め合う児童生徒の育成 ④チームで取り組むセンター的機能の充実
--------	--	----------	--

年 度 当 年 初						評価結果 (1 0) 月			
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	改善方策
① 学習指導の充実及び専門性の向上	小中学部	○児童のコミュニケーション能力の向上に向けた指導の充実。	○児童のコミュニケーション能力の向上に向け、語彙を増やすことや、相手への適切な伝え方の指導を継続して行っている。	○児童の語彙が増え、自分の考えを理由を付け加えて表現することができるような指導が充実する。	○国語学習を中心に語彙力を増やすとともに、適切な表現の仕方を習得できるようにする。 ○授業担当者が児童の考えを理由を付けて発表する時間を意図的に設ける。	○語彙、適切な表現(声の大きさ、言葉遣い、言い回し)について小中学部教職員と授業担当者が話し合い評価。 A: 十分達成。 B: 概ね達成。 C: 変化の兆し。 D: まだ不十分。	○国語の学習ではオノマトペや多義語等を使った詩や文章作りを行った。言葉に対する興味が少しずつ出てきており、進んで文章を書くことが増えてきた。学習の中で自分の考えを発表することを継続したことで、行事等で発表する際、自信をもって話すことができるようになってきている。	C	○現在の取り組みを継続しながら、さらに詩などの音読等言葉や本に親しむようにする。
	普通科	○各生徒の進路希望の実現に向けて、適切な目標設定と効果的な指導に努め、目標達成に向けた学習指導の充実。	○卒業後のめざす姿は、就労や進学とさまざまである。各教育課程の効果的な運用について教職員間での共通理解を深め、連携して取り組んでいく必要がある。	○教科担当や進路指導主事と連携し、各生徒の実態や進路希望に合わせた組織的な指導を行っている。	○各教育課程の特性に応じた効果的な指導について、教科担当を交えて協議する機会を設ける。 ○生徒の主体的な態度を育むための指導、支援の方法について共通理解を深める。	○連携に基づいた組織的な指導に対するアンケートを生徒、教職員向けに行い評価。 A: 生徒の実態や進路希望に応じた学習指導の成果が十分見られる。 B: 生徒の実態や進路希望に応じた学習指導の成果が見られる。 C: 成果が見られるが、改善の余地がある。 D: 取り組んでいるが、十分な成果が見られない。	○教科等横断的な指導やキャリア教育など学部を超えた連携を行うことで、生徒一人一人に応じた指導・支援の成果が見られつつあるが、生徒の実態についてさらに共通理解を深め学習指導を進める必要がある。 ○生徒アンケートの結果、半数以上が進路に興味を持ち調べ学習をしている。生徒は、更に学力を身に付け、自信をつけたいと思っている。	C	○生徒が多様な考えに触れながら実態に合った進路選択ができるよう、部科会等で生徒の実態の共通理解をする機会を設ける。 ○進路指導において、1年、2年先の生徒の姿を見通した適切な指導ができるよう、進路の手引きを基に部科全体で共通確認し、進めていく。
	保理専攻科	○生徒が主体的・対話的に学び、目標への見通しを持って粘り強く取り組むことをめざした授業改善。	○生徒は資格取得に向け積極的に学習している。 ○科目横断的な学びを深めるため学習内容のつながりを年間指導計画へ記載し、授業の工夫や職員間の連携に活用している。 ○科目横断的学びに活用できるe-ラーニング教材を理療科で作成しているが、内容の更新等が必要である。	○教職員は、e-ラーニングを効果的に取り入れた授業を実践し、科目横断的学びを深める研究に部科全体として取り組んでいる。□	○e-ラーニング教材の内容を更新・追加し、授業に活用する。	○e-ラーニング教材の作成状況により評価。 A: 完成している理療科目の教材が8割以上。 B: 5割以上。 C: 3割以上。 D: 3割未満。	○教科書改訂への対応を行いながら作業を進めている。作業担当を教材本文の作成と構成作業に分け、できるだけ効率よく作業が進むよう工夫している。 ○全19科目ある中、完成した科目はないが作成中のものについては8割程度完成しているものもある。	D	○引き続き進捗状況を部科全体で共有しながら来年度使用する科目を優先的に作業を進める。
	教務部	○各部科・分掌と連携を図り、円滑な日程調整と連絡、適正な授業時数の取扱いに努める。	○教科によって、標準時数を下回ることがある。	○全ての教科で授業時数を確保し、標準時数以上で実施する。	○授業振替、曜日振替を行い、過不足がないようにする。 ○時数集計表を活用し、授業時数を提示して、調整を行う。	○授業時数による評価。 A: 全ての教科で標準時数で実施できた。 B: ほとんどの教科で標準時数で実施できた。 C: ほとんどの教科で標準時数を下回った。 D: 全ての教科で標準時数を下回った。	○1学期末の時点ではあるが、ほとんどの教科で標準時数を実施できた。	B	○2学期も曜日振替を実施するとともに、授業振替を行い、時数集計表を見ながら、授業時数の過不足を調整していく。
	教育研究部	○児童生徒の資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントに基づいた授業づくり。	○昨年度、各教科学習の年間計画が一覧となった単元配当表を基に、教科の担当者間で連携し、生徒の主体的な学びを深める実践に取り組み始めた。今年度は、教科の担当者間の連携をより強くし、さらに深まりのある学習へとつなげていきたい。	○児童生徒の資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを理解し実践する教職員。	○校内研修で、カリキュラム・マネジメントについて理解する。 ○年間配当表を作成し、1人1授業実践していく。	○児童生徒の資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントに基づいた授業づくりの成果を感じたと答えた職員アンケートで評価。 A: 授業をしっかりと実践することができた。 B: だいたい授業を実践することができた。 C: 授業の計画を立て実践しようとしている。 D: あまり意欲的に取り組んでいない。	○1学期は各グループで計画を立て、2学期以降に授業を実践しようとしている教職員が多い。 ○カリキュラム・マネジメントの理解が不十分なために、計画や実践できていない教職員もあった。	C	○グループ研で、他の学校やグループの実践例を紹介する。児童生徒につけたい力を考え、そのためにはどのように教科と連携すればよいのかを話し合う。 ○カリキュラム・マネジメントの理解を更に深めるために、関連する研修資料を共有し、研鑽を重ねる。

② キャリア教育の推進	支援部	○自立と社会参加に向けて、キャリア教育の充実を図る。	○小学部から成人まで様々な年齢層の生徒が在籍し、将来の夢、目標も多岐にわたっている。 ○将来設計を具体化し、進路実現に向けて、個に応じた学習や体験活動を進めている。	○児童生徒がキャリアパスポートにあげた目標の達成に向けて、主体的に取り組んでいる。	○進路学習や実習の目標設定にキャリアパスポートの活用を推進する。 ○キャリアパスポートの目標を教室掲示する。 ○児童生徒が進路学習や実習における自分自身の評価を把握できるように報告会や振り返りの学習を設定する。	○体験活動や進路学習等のキャリア教育を通して、キャリアパスポートの目標達成に向けて努力したか、児童生徒及び教職員のアンケートにより評価。 A：努力した児童生徒が100%。 B：努力した児童生徒が80%。 C：努力した児童生徒が60%。 D：努力した児童生徒が40%。	○キャリアパスポートの目標を教室掲示しているが、意識している生徒としていない生徒の割合が半々であった。 ○自分の目標を意識して学校生活を送っている生徒は、達成に向けて努力したと回答していることが多かった。	C	○進路学習や実習での児童生徒が自身の学びや評価を把握できるよう、キャリアパスポートを見る機会（10・11月、1月）を設け、進路実現に向け主体的に取り組めるようにする。
	寮務部	○社会参加を意識した人との関係づくり、協力して取り組む力を育む。	○個別の教育支援計画のもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けての指導支援を行っている。継続した取組で、主体的な行動が増えている一方、コロナ禍の影響もあり、他者を意識した場面や言動が少なくなってきたおり、集団生活において課題も見られる。	○舎生一人一人の実態を随時職員間で共有し、舎生の他者を意識したあいさつや言葉かけ、行動等が増えている。	○生活の中で、他者を意識した場面をできるだけ多く設定する。 ○寄宿舎における行事・活動等の企画・運営で、舎生が互いに協力しながら内容を考えたり運営したりする場を設定する。 ○家庭・学校等との連携を軸とした主体性育成のための指導・支援を行う。	○他者を意識した姿に向けた働きかけにおける評価。 A：他者を意識した言動への働きかけの成果が十分に見られる。 B：他者を意識した言動への働きかけの成果が見られる。 C：他者を意識した言動への働きかけの成果があまり見られず、改善の余地がある。 D：取り組んでいるが、成果が見られない。	○生活や行事の係で舎生が協力したり、積極的に活動したりする姿が見られた。一緒に活動する時間が増え、他者を意識した言動も増えてきているが、場面が限定的、関わり方が受動的な側面もある。	C	○十分な話し合いの時間を確保しながら、舎生の他者を意識した活動場面設定を継続し、全体で個に応じた指導・支援にあたっていく。 ○情報共有した内容は全体で周知し、必要に応じて検討・協議する。
成る③ 仲間と協力する	指導部	○児童生徒が主体となり、仲間と信頼関係を深め、協力しながら運営する児童生徒会活動の推進。	○行事担当は児童生徒の立候補によって決まっているが、話し合いの時間が十分ではなく、教職員がリードして行事を進める場面もある。	○児童生徒が話し合いによって行事の内容や役割分担を決め、当日の進行などの運営も児童生徒主体で活動する。	○児童生徒会行事等の前に担当児童生徒の話し合いの時間を確保する。 ○教職員は児童生徒の話し合いを見守り、過度に介入しないようにする。	○児童生徒にアンケートを取り、その結果を元にして指導部教職員で話し合い評価。 A：十分達成。 B：概ね達成。 C：変化の兆し。 D：まだ不十分。	○児童生徒会行事でアンケートを実施したのは児童生徒交流会。担当生徒3名は全員が主体的に準備の話し合いができたこと回答。また、当日の運営も2名が主体的にできたこと回答	B	○今後の児童生徒会行事についても、児童生徒主体で進められるよう話し合いの時間確保等に努める。また、アンケートを実施して評価を行う。
④ センター的機能の充実	支援部	○積極的に情報発信してセンター的機能の周知を図り、視覚障がいの理解啓発、指導支援を充実、推進する。	○おたよりやホームページでの情報提供・公開に努めた。 ○依頼に応じ、教育相談や視覚障がい理解学習支援等をすすめた。親子教室を継続的に実施した。 ○夏と冬に本校を会場に特別支援学級等とのふれあい交流会が実施できた。	○積極的に情報発信をしてセンター的機能の周知をし、校内の人材を活用した見え方等に応じた支援を進める。	○弱視特別支援学級10校と盲学校をオンラインでつなぎ、タイムリーでニーズに合った支援をする。 ○ホームページを定期的に更新する。 ○保健師へ乳幼児支援の周知をする。	A：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら毎月定期的にホームページやおたよりで視覚障がいの情報発信をした。 B：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に2回以上は情報発信をした。 C：ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に1回情報発信をした。 D：ニーズに応じた支援活動を推進しながら年2回は情報発信をした。	○県内弱視学級校とGoogleClassroomでつながり、情報提供と情報共有を行っている。 ○就学前のおたよりを年度当初に発行した。 ○県内19市町村に乳幼児支援のチラシを配付した。 ○体験ツアーや夏のふれあい交流会等のチラシを送付したり持参したりした。	B	○見えにくさのある乳幼児や児童・生徒の在籍園や在籍校の訪問も含めた相談・支援を推進する。 ○GoogleClassroomで15分から30分程度のミニ研修会・情報交換会を行う。 ○12月のふれあい交流会に向け準備をすすめる。
	総務部	○鳥盲ボランティアとの活動により地域との連携を深める。	○鳥盲ボランティアの登録はあるが、しばらく活動はできていない。昨年度も環境整備の際に計画をしたが中止となった。地域の方との連携を深めたい。	○鳥盲ボランティア年間予定に沿って、児童生徒とともに活動している。	○学校の要望と地域の方の願いを聞きながら新たな鳥盲ボランティア会員を募集する。 ○お互いに有意義な活動となるよう活動内容を計画して実施する。	○鳥盲ボランティア活動状況で評価。 A：年間予定に沿って活動できた。 B：概ね年間予定に沿って活動できた。 C：年間予定の半分程度活動できた。 D：活動したが、予定通りにはできなかった。	○ボランティアの人数は多くはないものの、年間の予定に沿って活動できている。	A	○地域との連携を深めるとい意味で募集の方法を工夫し、新たな登録者を広げていく。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分

[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度]